

# 軍事史学

第45巻 第1号

## 巻頭言

### 逆説「所見なし」

陸軍大学校には卒業年次に校長引率の一カ月近い満州・朝鮮見学旅行があった。経路は大連、旅順、奉天、長春、吉林、新義州、平壤、京城、釜山という日清、日露の古戦場を巡るもので、日数、距離、経費の点から考えると陸大としてもかなり重要な行事であった。学生にとっては旅行自体は楽しい反面、帰校後の報告書は負担であった。石原莞爾がこの報告書に「所見なし」と書いて提出したことはよく知られている。その石原がその時から一三年後に「所見なし」どころか、政府とは全く逆の「所見」に従って満州事変を引き起こしたのも周知のことである。

石原の「所見なし」には前段がある。陸大入校以来、石原が最も頭を悩ませた問題は、日露戦争に対する疑惑であった。あの勝利は僥倖の上に立っていたのではないか。もしもロシアがもう少し頑張っていたら日本の勝利は危なかったのではないか。彼はその疑問を教官に投げかけたが、返ってきたのは「はなはだ危険な質問である」という答えであった。日露戦争は決戦戦争としては研究されても、持久戦的な意味ではタブー視されていたのである。

満州・朝鮮見学旅行にしても、一昨年刊行された『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将 宇都宮太郎日記』によれば、宇都宮が陸軍大学校幹事時代の明治四十年一月に計画した段階では「参謀旅行」として実施するつもりであった。ところが、大正三年に実現したときには単なる物見遊山の修学旅行になっていたのである。石原が「所見なし」としたのはそうした陸大の態度への批判であったと見ることができるといえる。

昨年、前空幕長田母神俊雄氏の論文が政府の公式見解と異なるというので問題になった。石原とは逆に政府見解と違う「所見」を発表したことを咎められた形だが、田母神論文の問題点はむしろその内容にある。日本の正当性を主張するあまりに、問題意識を開戦理由等の追及に限定し、敗戦理由の追及を避けていることである。敗戦国にとって重要なのは開戦理由ではなく、むしろ敗戦理由の方ではないのか。少なくとも問題意識を限定しない姿勢が必要であろう。

(野村二郎)